

# 緘黙のひきこもり青年4名への就労支援の取り組み

～ICF的理解とIPS支援を援用した、ひきこもり支援の新たな支援モデルの提案と考察～

横田 裕幸 1)3)      山本 彩 2)

1) 一般社団法人こころとキャリアの発達支援推進機構 2) 札幌学院大学 3) 大阪芸術大学

**【目的】**「ひきこもり支援のゴールは就労ではない」という言説が強調されることがある(斎藤, 2020; 目良, 2019 ほか)。しかし Individual Placement and Support (以下、IPS) の理念が主張するように、就労そのものが治療的かつノーマライゼーションを促進するものであることを考えると、それらの判断には慎重になる必要がある。筆者らは4名の緘黙のひきこもり青年に対し、従来のひきこもりの段階的支援論とは異なる、ICFとIPS支援の考え方を統合させた支援を行い、奏功した経験を得た。その支援方法と事例の報告を行い、考察を加えたい。

**【方法】**2020年1月から2022年6月までに、A市子ども・若者総合相談センターへ「ひきこもり」を主訴に来談した青年6名のうち4名を本事例報告の対象とする。事例発表に際し本人へ書面と口頭で説明、同意を得ている。

**ICF的理解に基づくアセスメントとIPSを統合した支援:**IPS支援は、「働きたい」という希望があれば重い精神障害があっても一般就労が可能という強い信念に基づく就労支援モデルである。その効果はメタ分析で確認されている(Metcalf et al., 2018)。一方、ひきこもりは自尊心を温存するための回避行動の側面が大きく、IPS支援の前提である「働きたい」希望はあったとしても、現実に踏み出せないのが常であり、本人が実現可能性を実感できる選択肢を如何に具体的に提案し、如何に本人の自信や意欲を引き出せるかが大きな課題となる。そこで筆者らは、カウンセリング的アプローチの継続で難渋していたケースに対し、1) IPS 就労支援に、2) ICFモデルに基づいたアセスメントを行い、3) 2)を基に①本人の strength を見だし、②本人がそのまま「機能」できる職場にピンポイントで繋ぎ、環境にも働きかけ、③グループワークやSSTを導入して本人の心身機能や活動水準の向上にアプローチする試み、を統合した支援を行った。**事例:**個人情報および個人を特定するエピソードを削除して報告する。①A: 20代後半男性、小学校から緘黙、約10年ひきこもり。相談開始から2年半、職場実習提案から4ヶ月で就職。就職後、「自信が出てきた」と随分笑顔が増えた。②B: 20代前半男性、緘黙傾向。顕在的な不安は最も高い。約2年ひきこもり。相談開始から3年、職場実習提案から8ヶ月で就職。実習に行き始め、自信が付き落ち着いた雰囲気になった。③C: 20代後半男性、小学校から緘黙。10年ひきこもり。すぐ職場実習等を提案、来談後8カ月で就職。自発語も出るようになり、「話したいという気持ちが強くなった」と述べる。④D: 20代後半男性、小学校から緘黙、高校中退後10年以上ひきこもり。母から受診希望があり、自閉スペクトラム症と選択的緘黙症の診断。「自信がない」と職場実習に踏み出せなかったが、Cが実習する様子を見学に行き、黙々と仕事する姿を見て安心し、職場実習を希望。**【結果】**事例ABCは、カウンセリング的な相談支援の継続では状態像の変化は認められなかったが、職場実習に出て、現実の職場で受け入れられ労働力として認められる体験の中で、自分もやっていけるという自信が日に日に強まり就労継続が可能となった。事例Dは現実的に障害者雇用も含め、今後の進路を考えるようになっている。**【考察】**ICF的理解とIPS的支援により、「環境因子」に働きかけ、本人の「心身機能」のまま労働力として「機能」できる職場に出会えたこと、並行して自分でも出来そうと思え、実習に踏み出す自信ができたこと、そのためにさらに「心身機能」に働きかけることができたこと、そして実際に仕事を体験する中で、疑似的社会の居場所ではなく現実社会の職場で受け入れられ労働力として認められる実体験を実現したことが、本人たちの「生活機能: functioning」全体の大きな変容をもたらしたと考えられる。

**【倫理的配慮】**所属長に研究計画を伝えた承を得ている。

**【COI 開示】**COIは存在しない。